和合亮一が「余震」で表したもの　ー詩の礫からー

6年 ●●　附属担当：●● アドバイザー：文学部 ●●先生

研究の背景

復興支援活動で福島へ行き、震災被害を受けた方のお話を聞いたり、野原と化した町を見た。その活動で私は復興に向けて取り組んでいる人の姿にひどく心を動かされ、大きな震災から復興に向かう人の内面の姿に関心をもった。そこで『和合亮一が語る福島』（鈴木康史、まほろば叢書）を読み、被災6日目からツイッターで震災への怒りや故郷への思いを詩に乗せて発信し続ける和合亮一さんを知り、被災者である和合亮一が書く『詩の礫』を通して震災から復興に向かう人の内面を探ろうと考えた。

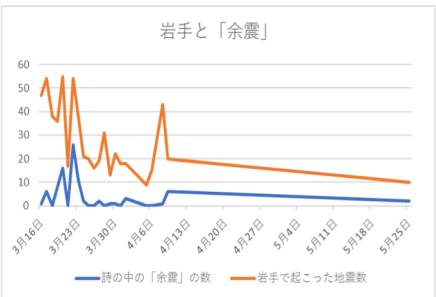
【研究3ー1】『詩の礫』で表現される「余震」と実際に起きた地震に関係性はあるか調べる。

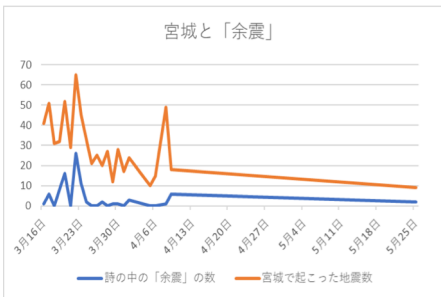
〇方法

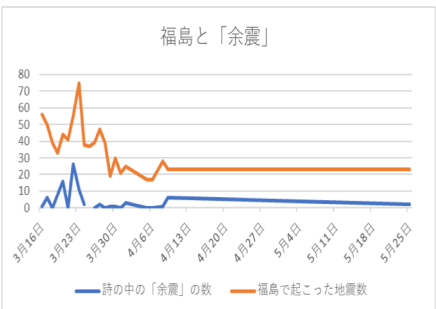
①地震データベース検索（国土交通省気象庁のHPより）を使用し、2011/03/16～2011/04/01、2011/04/05～2011/04/06、2011/04/08～2011/04/09、2011/05/25（いずれも詩が投稿された日である）に東日本大震災で被害が大きかった岩手県、宮城県、福島県、作者の妻と息子が被災後に避難した山形県で00：00～23：59までに起こった震度1以上の地震を調べる。

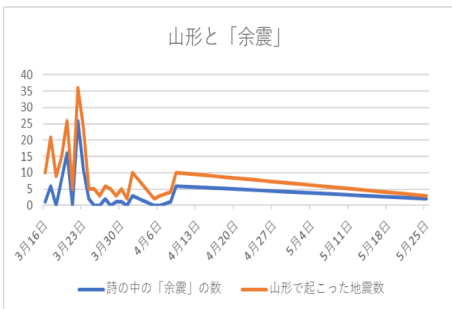
②作者が１日分の詩に「余震」と表現した回数と1日で起きた地震の回数は関係があるかグラフに表し、各県で起こった地震と詩の中に書かれている「余震」に相関の関係があるか調べる。

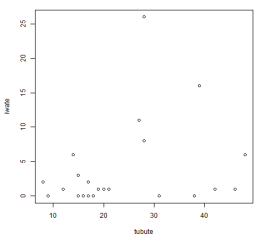
〇結果と考察



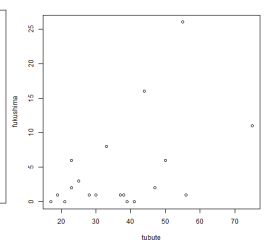




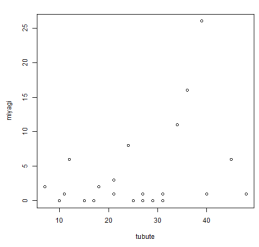




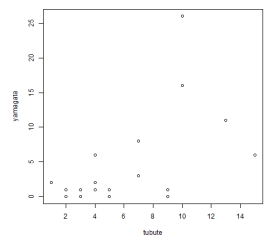
岩手



福島



宮城



山形

・相関の関係

（相関係数と相関の強さの解釈は右の表を目安に行う）

相関係数（ｒ）	相関の強さ
0.7<r≦1.0	強い正の相関
0.4<r≦0.7	正の相関
0.2<r≦0.4	弱い正の相関
-0.4<r≦-0.2	弱い負の相関
-0.7<r≦-0.4	負の相関
-1.0<r≦-0.7	強い負の相関

岩手と「余震」…0.267644

宮城と「余震」…0.363556

福島と「余震」…0.488535

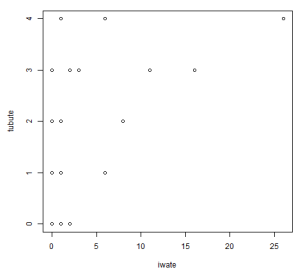
山形と「余震」…0.567126

⇒折れ線グラフの形から、詩の礫の中で表現される「余震」と実際に起こった余震には関係性があると考えられる。相関の関係を調べると岩手、福島、宮城で起こった地震の回数と「余震」は弱い正の相関の関係であった。これは3.11の地震発生直後、３つの県では震度1の地震がとても多く起こっており、それらが外れ値となって相関係数に影響を与えていると考えた。

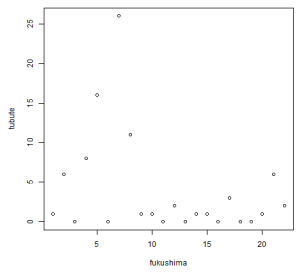
【研究3－2】『詩の礫』で表現される「余震」と実際に起きた地震に関係性はあるか調べる。

【研究３－１】の結果をふまえて、岩手、福島、宮城で観測された震度３以上の値（震度3は屋内にいるほとんどの人が揺れを感じる揺れである。（参照：気象庁）と詩の礫で表現される「余震」の相関の関係を調べる。

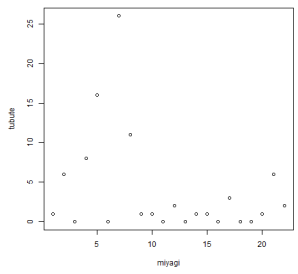
〇結果と考察



岩手



福島



宮城

・相関の関係

岩手と「余震」…0.502429

福島と「余震」…0.507248

宮城と「余震」…0.607003

⇒岩手・福島・宮城の３つの県と詩の礫に表現される「余震」には、正の相関関係がある。ここから、作者は地震の揺れに怒り、恐怖、不安を感じ詩に「余震」と表現したと考えられる。

【研究４】　実際に起きた地震と考え合わせながら、『詩の礫』に書かれている「余震」のグループ分けを行う。

〇方法

①地震データベース検索（国土交通省気象庁のHPより）を使用し、2011/03/16～2011/04/01、2011/04/05～2011/04/06、2011/04/08～2011/04/09、2011/05/25（いづれも詩の礫に掲載されていた詩が投稿された日である）に東日本大震災で被害が大きかった岩手県、宮城県、福島県、作者の妻と息子が被災後に避難した山形県で00：00～23：59までに起こった震度３以上の地震を調べる。

②詩が投稿された時間から5分前までに４つの県で震度３以上の地震があれば、それは「作者が地震の揺れに影響して投稿した詩である」と考えたうえで、詩の礫で表現されているすべての「余震」を以下の6つのグループに分ける。（6つのグループ分けは【研究1】を基にしたものである。）

Ⅰ、大地震の後に起こる小地震を意味する「余震」

Ⅱ、作者に呼びかける「余震」

Ⅲ、擬人化された「余震」

Ⅳ、作者とリンクする「余震」

Ⅴ、作者の感情の起爆剤である「余震」

Ⅵ、その他

〇結果と考察

分析と考察は資料参照

⇒Ⅰ、大地震の後に起こる小地震を意味する「余震」とⅡ、作者に呼びかける「余震」のみ地震の揺れと関係性があった。【研究３】では1日で感じる揺れの回数と詩に表現される「余震」の回数には関係性があるとわかったが、【研究４】の結果から実際に投稿しているときに感じた揺れを詩に表現しているわけではないと考えられる。それは作者の詩の書き方（パソコンのメモ書きを見ながら1日分の詩の投稿を22：00頃から始める）が影響していると考えられる。

⇒Ⅲ、擬人化された「余震」と分類できた詩は、実際の地震の揺れと関係がないと分かった。ここから、擬人化された「余震」は単なる自然災害を表すものでなく、何度も繰り返し作者を襲い、作者の心の中に住みついた得体のしれないものを表していると考る。

⇒この研究の分析と考察は、私が考えた分析と考察であるため、統計学のように論理的な根拠を導いて分析し考察できていない。そのため今後の研究課題として、作者の周りに起きた出来事などを根拠に「余震」をグループ分けすることがあげられる。

和合良一が「余震」で表したもの

「余震」は和合亮一を追い立てるものであり、和合亮一の心の中に住むものである。

実際に感じた揺れと詩に表されている「余震」には時間的な関係性があることから、揺れを感じるたびに作者自身に怒りや不安な気持ちを起こすものであり、地震の揺れを感じていないときでも「余震」は詩に擬人化された得体のしれないものとして表現される。3.11の大きな地震が過ぎても頻繁に揺れは続き、作者は余震と共に暮らし、余震が起こるたびに明日には自分の生活が消滅するのではと不安な気持ちに駆られ続けた結果、「余震」は作者の心の中に住みつき、作者の怒りや不安といった心のありようを表す言葉となったと考える。

資料① 和合亮一が「余震」で表したもの －詩の礫から－ ●●

【研究４】 実際に起きた地震と考え合わせながら、『詩の礫』に書かれている「余震」のグループ分けを行う。

〇結果

「作者が地震の揺れに影響して投稿した詩である」と考えた詩を赤色で示す。

Ⅰ、大地震の後に起こる小地震を意味する「余震」

詩の内容	分析と考察	地震発生時刻と震源地と最大震度
3月１６日　２３：５０ 「また揺れた。とても大きな揺れ。ずっと予告されている大きな余震がいよいよなのかもしれない。（以下略）」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	23：46　宮城県沖　最大震度４
3月１７日　２２：１８ 「ひどい揺れの中で、眠っていたわけではないが、また目が覚めた。眠ることなど、ほとんどない。いつも目覚めさせられてばかり。揺れ動かされてばかり。しーっ。余震だ。」	・大地震の後に起こる小地震の意 ・「しーっ。」というフレーズが、詩の最後に緊張感を持たせ、作者に呼び掛けている。	
3月17日　２２：２０ 「余震とは、真正の地震の余剰であるとするのなら、これらの地の震えはものみな全てが、何らかの上澄みであるのか、地よ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	
3月１９日　４：１９ 「余震。横揺れは激しい。その間も、水は滴り続けるが。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	
3月19日　４：５７ 「書こうとすると、余震。ならばもっと背中に書いてやる。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	04：53　福島沖　最大震度３ 04：57　新潟中越　最大震度２
3月１９日　２３：４９ 「余震（①）。諾。さっき。茨城県沖震度5強。福島震度４．激しい横揺れ。玄関で待機。地鳴りが激しいので階下へ。裸足。地の激しさが増す。僕には羽が生えているんだ。余震、余震、余震（②）	①、②共に大地震の後に起こる小地震の意である。②は余震を３つ並べることでは「羽が生えている僕」を表している。	
3月２０日　２２：０１ 「しーっ、余震だ。何億もの馬が怒りながら、地の下を駆け抜けていく。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月２０日　２２：０５ 「ほら、ひづめの音が聞こえるだろう、いななきが聞こえるだろう。何を追っている、何億もの馬。しーっ、余震だ。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月２０日　２２：５７ 「長い余震の後で、私たちは子供たちの手を握るだろう。さらなる余震の後で手を握ろう。もう大丈夫だよ・・・。だから、ね・・・。 私たちの大人の手を離さないで。ぎゅっと強く握ってごらん。また・・・。震えている、地も、きみも。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。子供の手が震えるほど恐ろしい余震。	
3月２０日　２３：００ 「長い余震（①）の前。午後４時７分。４３１件のメールを受信する。ヘリコプターの音。余震。（②）」	共に大地震の後に続いて起こる小地震の意である。特に②ヘリコプターの音と余震（の前兆）がリンクしている。ヘリコプターの音を聞いて余震か、と驚く著者が想像できる。	
3月２０日　２３：０３ 「長い余震のさなか　地の下を駆ける馬の群れの行方には何がある　私は尋ねたい　何億の現在というものに　否　馬たちは追っているのではない　追われているのだ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	
3月２０日　２３：１０ 「緊急地震速報。馬が追う、言葉が追う、余震が追う。緊急地震速報、馬が来る、言葉が来る、余震が来る。何に、何に追われている。緊急地震速報。命、命に追われている。・・・優しく、優しく・・・。呟く、祖母の命、命が追ってくる。」	・大地震の後に起こる小地震の意。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月２０日　２３：３５ 「人よ、原子力よ、宇宙よ、封鎖された駅よ、失われた卒業式よ、余震だ。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意である。揺れに壊されたものと一緒に述べられている。	２３：３５　福島沖　最大震度２

資料② 和合亮一が「余震」で表したもの －詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震発生時刻と震源地と最大震度
３月２２日　２２：５０ 「現時点。死亡４３０４人、安否不明１６６３０人、５００、５５５。今日の現実に対して詩を捧げます。余震。」	大地震の後の小地震の意。	２２：５０　茨城沖　最大震度３
３月２２日　２２：５８ 「『福島第一　制御困難』。来るべき時が来たのか、否。希望を信じるか。余震。大きい。まただ。ツイッターガウゴイテクレナイ、震度4。この速度の出しにくさは、困難。制御。第一。福島。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。 「余震」を境に詩の流れが変わっている。希望を信じようと思ったが、余震という現実を目の当たりにした作者の希望が失われているのがわかる。	
3月２３日　前書 「今日も余震が多くて　横揺れが激しいです　もしもの時　途切れたとしても　必ず　どんな形でも続きをいたしますから　心配なさらないで　下さい揺れが大きい」	大地震の後に起こる小地震の意。２２日の詩と前書きから、この時の作者は余震に悩まされていたと推測できる。	
３月２３日　２２：０５ 「余震だ。不覚にも朝方に、何億もの馬たちに襲われる。すっかりと慌てた僕はコードを抜き、くるり振り向き、パソコンを持ち、階下へ。背中で激しく、倒れた音を聞きながら。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。 「何億もの馬たちに襲われる」は余震を意味しており、余震の激しさを表現している	
３月２３日　２２：１８ 「余震。何億もの馬。空に駆け上がろうとしているのだろうか。息を殺して、現在を黙らせるしかない。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。「何億もの馬」は余震を意味している。	
３月２３日　２２：２１ 「余震。茶碗を洗っている息を殺して、現在を洗いつくすしかない。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。	
３月２３日　２２：２５ 「余震。原稿用紙に文字を埋める。また余震。埋めつくすしかないのだ、震える現在を。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。文字の並びから揺れの強さが分かる。	
３月２３日　２２：３２ 「たくさんの馬の背。そこから地鳴りがして、余震だ。浮かんでいる。たゆたっている。運ばれてくる。何。時。真理。命。悲しみ。怒り。慈しみ。」	大地震の後に起こる小地震の意。	
３月２３日　２２：３２ 「たくさんの馬の背。そこから地鳴りがして、余震だ。浮かんでいる。たゆたっている。運ばれてくる。何。時。真理。命。悲しみ。怒り。慈しみ。」	大地震の後に起こる小地震の意。	
３月２３日　２３：２９ 「余震（①）。いわき震度５．それにしても４や５が普通の感覚になっているのが、あらためて恐ろしい。息子と電話で話す。今の避難先の、山形の学校に、一時的にでも転入することも考えなくて・・・な。余震（②）か。」	①②大地震の後に続いて起こる小地震の意。地面が揺れることに慣れってしまった様子が②からわかる。	
３月２４日２５日　前書 「１０日ぶりの買い出し。トマトを買おうと思ったら余震。家に持ち帰り、野菜が涙を流しているのが分かった。」	大地震の後に起こる小地震の意。	
３月２４日２５日　後記３ 今日の余震もひどい横揺れでした。かすかな横揺れ。それが長く続いて、ゆっくりと激しい横揺れと音が響いてきます。近づいてくる、地。惨事の中、暗闇を進むしかない。たゆたいながら、希望をもって生きていきます。だからあなた。生きていてください。生きていって下さい。明けない夜はない。」	大地震の後に起こる小地震の意。	

資料③ 和合亮一が「余震」で表したもの －詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震発生時刻と震源地と最大震度
3月２７日　２２：１４ 「私はガソリンを求めて街を行く。もうじき切れてしまうからだ。地震、余震、津波、放射能、風評被害。昨日、発電所から２０～３０キロ圏内の、最大２００００人が避難対象となった。私は私を罵倒するようになった。かなり蝕まれているな、精神。たくさんの影、風評。」	大地震の後に起こる小地震の意であり、一緒に並べられている、余震、津波、放射能は作者を襲ったものである。	
3月３０日　２２：２４ 「また、余震だ。しーっ。」	・大地震の後に起こる小地震の意 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	２２：１９　茨城沖　最大震度３
4月1日　２２：０５ 「そして、私の風呂は余震（①）のうちに、一昨日から、壊れたままだ。まず、バスタブの電気が消えた。翌日には点いた。すると今度は、風呂が消えた。余震（②）。」	共に、大地震の後に続いて起こる小地震の意。②は文末に倒置されていることから、①とは違い、「作者の（生活の一部である）風呂を壊した余震」に対する怒りが込められていると考える。	２２：０５　宮城沖　最大震度３
４月８日　通信 「◎『しーっ、余震（①）だ』。昨晩の余震（②）の後で大丈夫でしたか？というメッセージを数多くいただきました。かなり大きいものでした。書斎は本棚が動き、本や置物などが落ちたりして大変でした。でも大丈夫です。ありがとうございました。」	①『』は作者の昨日地震が起きた時の気持ちを表し、作者自身に呼びかけている ②大地震の後に続いて起こる小地震の意。	
4月9日　２２：５４ 「四月七日、午後十時、余震。宮城県沖、震度６強。地の底から地団駄。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意。（４月７日午後１１時３２分に宮城県沖で地震が発生したと記載されている）	
４月　９日　２２：５６ 「余震（①）。地の波。私たちをあらためて追いたてる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも手を休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。四月七日。午後十時、余震（②）。宮城県沖、震度６強。もはや、宇宙からの断罪。」	共に大地震の後に続いて起こる小地震の意である。②は後に続く、「宇宙からの断罪」から、作者の生活に与えた余震の衝撃が分かる。（それが物理的なものなのか気持ちなのかは不明）	
５月２５日　２２：３０ 「何億もの馬が、地かを駆け抜けていく。しーっ、余震だ。否。地震酔いだろうか、嫌、確かに・・・、すぐに震度４強。わかるようになっているね。ウン、時々ネ。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 この詩は、初めに書かれていた怒りや不安ではなく、冷静な気持ちが書かれていることから、作者は余震と共に生活していることが分かる。 ・最後の「しっー、」というフレーズが詩全体に緊張感をたせ、作者に呼び掛けている。	

Ⅱ、作者に呼びかける「余震」

「しーっ、余震だ。」と多く書かれている。これらは「余震」という言葉が表す意味は、リンクする「余震」や詩全体に緊迫した空気を与える「余震」など、一つ一つの意味は違うが、全て誰かに呼びかけているものであることが共通している。誰に呼びかけているものなのか、はっきりと記述されてはいないが、多くが自分の体験や今の生活に対する不安と一緒に述べられていること、３月２７日には「しーっ、余震だ。」を境に作者の気持ちを述べるのを止め福島で今起きている事実が述べられていることから、私は作者自身に余震を体だけでなく心から受け止めるために呼びかけていると考える

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
3月１７日　２２：１８ 「ひどい揺れの中で、眠っていたわけではないが、また目が覚めた。眠ることなど、ほとんどない。いつも目覚めさせられてばかり。揺れ動かされてばかり。しーっ。余震だ。」	・大地震の後に起こる小地震の意 ・最後の「しーっ。」というフレーズが、詩全体に緊張感を持たせ、作者に呼び掛けている。	
3月１７日　２２：２４ 「震度はどのようにして測る。その度数とはいかなる基準であるのか。ある日は丘の上に立った、小さな旗を眺めていた。あの風にも旗にも、そして揺れるままの現在にも、度数はあるのか。地よ。しーっ、余震だ。」	・地震の揺れと共に生活する不安と余震が起きた時の不安がリンクしている ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月17日　２２：２７ 「昨日。ガソリンスタンドに車の一列。長蛇の列が３時間ほど続くが、一度も動かず。一番前から伝達。「スタンドは開かない」。開くという事実すら無かった。有ったのは、車の一列。何が私たちを並ばせようとするのか、しーっ、余震だ。」	・何も情報がない中生活している自分と予告なく揺れる余震をリンクしている。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	

資料④ 和合亮一が「余震」で表したもの－詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
3月１７日　２３：３３ 「まず地鳴りがする。そして揺れる。一瞬、何かがはしゃぐのだ。ほら、この静けさは騒がしい。しーっ、余震だ。」	・最後の「しーっ、」というフレーズが詩の表す静けさを表現するのと同時に詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月１７日　２３：５０ 「ガソリンもなく、放射能が降ってくるので、今日は家に隠れていた。誰とも語らず、何も考えない。次第に息を殺しているこの部屋そのものが自分で、私はここには居ないことに気づいた。死者・行方不明者は１３４００人。ここにはいない。しーっ、余震だ。」	・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月２０日　２２：０１ 「しーっ、余震だ。何億もの馬が怒りながら、地の下を駆け抜けていく。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛け、怒りの気持ちを掻き立てる。	
3月２０日　２２：０１ 「しーっ、余震だ。何億もの馬が怒りながら、地の下を駆け抜けていく。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛け、怒りの気持ちを掻き立てる。	
３月２０日　２２：０２ 「しーっ、余震だ。何億もの馬が泣きながら、地の下を駆け抜けていく。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛け、不安な気持ちを掻き立てる。	
3月２０日　２２：０５ 「ほら、ひづめの音が聞こえるだろう、いななきが聞こえるだろう。何を追っている、何億もの馬。しーっ、余震だ。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	
3月２７日　２２：４４ 「しっー、余震だ」	・「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。 ・この投稿の前には、福島で今起きている事実（飯館村の牛、ガソリンを求める車の列など）が書かれているが、この投稿の後は作者のことや気持ちが書かれている。この投稿を境に内容が変わっていることから、文脈を大きく変化させる役割をしていると考える。	２２：４１　宮城　最大震度３
3月３０日　２２：２４ 「また、余震だ。しーっ。」	・大地震の後に続いて起こる小地震の意である。 ・最後の「しーっ、」というフレーズが詩全体に緊張感もたせ、作者に呼び掛けている。	２２：１９　茨城沖　最大震度３
４月８日　通信 「◎『しーっ、余震（①）だ』。昨晩の余震（②）の後で大丈夫でしたか？というメッセージを数多くいただきました。かなり大きいものでした。書斎は本棚が動き、本や置物などが落ちたりして大変でした。でも大丈夫です。ありがとうございました。」	①『』は作者の昨日地震が起きた時に、作者自身に呼びかけた様子が表されている。 ②大地震の後に続いて起こる小地震の意。	

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
4月9日　２２：２７ 「地震酔い、醒めやらない揺れの中で私たち、地震酔い、揺れていなくても揺れている、揺れていても揺れている、揺れていても揺れていなくても揺れている、揺れていても揺れていなくても揺れていない、揺りかごの中で、しーっ、余震だ。」	・地震酔いをしている、揺れていなくても揺れている作者の姿と余震がリンクしている。 ・最後の「しっー、」というフレーズが詩全体に緊張感をたせ、作者に呼び掛けている。	
5月２５日　２２：３０ 「何億もの馬が、地を駆け抜けていく。しーっ、余震だ。否。地震酔いだろうか、嫌、確かに・・・、すぐに震度４強。わかるようになっているね。ウン、時々ネ。」	・「否。地震酔いだろうか、」と振り返っている様子から、「しっー、余震だ。」は作者に呼びかけている、と考えられる。 ・この詩は、初めに書かれていた怒りや不安ではなく、冷静な気持ちが書かれていることから、作者は余震と共に生活していることが分かる。	

Ⅲ、擬人化された「余震」

まるで作者の心の中に住み着く「悪魔」のように擬人化された余震

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
3月２０日　２２：１３ 「余震。何を追っているのか、馬よ。世界の暗がりのなか、宇宙のひずみのなか、両親を亡くした坊やの波か。もういいじゃないか、追うな、馬よ。私たちはどんなに傷ついても、何億ものたてがみを撫でよう。泣きながら、撫でよう優しく、優しく、、、。」	擬人化された「余震」。 揺れ、迫る様子が擬人化されている。	
3月２０日　２２：２８ 「馬が追う、言葉が追う、余震が追う。馬が来る、言葉が来る、余震が来る。馬に取り残される、言葉に取り残される、余震に取り残される。僕は幼くなるしかない。うわあああん。あかあさーん、おかあさーん。」	擬人化された「余震」。それは、馬のように作者を追うもので、作者を取り残すものであり、作者にとって恐ろしいものであることがわかる。続く、「うわあああん。おかあさーん、おかあさーん。」という記述は作者の気持ちが乱れていることがわかる。 この独特なリズムは馬が駆けるよう迫ってくる音、頭の中にあふれ出てくる言葉、作者を襲う余震を表している。	
3月２０日　２２：４３ 「余震もまた怒るのか。そして全ての激怒をきれいに忘れてしまうのか。」	擬人化された「余震」。作者を怒鳴るものであることがわかる。	
3月２０日　２３：１０ 「緊急地震速報。馬が追う、言葉が追う、余震が追う。緊急地震速報、馬が来る、言葉が来る、余震が来る。何に、何に追われている。緊急地震速報。命、命に追われている。・・・優しく、優しく・・・。呟く、祖母の命、命が追ってくる。」	擬人化された「余震」。それは、馬のように作者を追うもので、作者を取り残すものであり、作者にとって恐ろしいものであることがわかる。 この独特なリズムは馬が駆けるよう迫ってくる音、頭の中にあふれ出てくる言葉が作者を襲う余震を表している。	
3月２０日　２３：５３ 「余震よ、静かに。子供たちが、お年寄りが、眠れないから・・・。ほら、真夜中の、福島の、木陰で、水を飲み、草をお食べ、そうしなさいよ。」	擬人化された「余震」。まるで余震と友達のように表現されている。後には著者の収まってほしいという切実な思いが述べられている。	
3月２２日　２２：０８ 「制御とは何か。余震。」	擬人化された「余震」。作者が余震に「制御」について尋ねていることから、余震は「制御」するかどうかコントロールできるものであるのかもしれない。	
3月22日　２２：１３ 「あなたは『制御』しているのか、原子力を。余震。」	擬人化された「余震」。作者が余震に「原子力の『制御』」について尋ねていることから、余震は原子力の「制御」をコントロールしているのかもしれない。文中にある「あなた」＝「余震」であると考えられる。	
3月２２日　２２：１６ 「人類は原子力の素顔を見たことがあるか。余震。」	擬人化された「余震」。作者が余震に「原子力の姿」について尋ねている。	
3月２２日　２２：３４ 「言葉に乞う。どうか優しい言葉で、いてくださいよ。ね・・・。余震。」	擬人化された「余震」。作者が言葉に乞い、余震に乞う姿が想像できる。	

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
３月２２日　２２：３６ 「制御。あなたは、たまなく押し寄せる、太平洋のさざなみを、優しく止めることができるのか。余震。」	擬人化された「余震」。太平洋のさざなみを受け止める様が擬人化されている。	
３月２２日　２２：３８ 「制御。あなたは、こんなにも愛しい人への想いを、静かにとどめることが出来るか。できないと思うよ。余震。」	擬人化された「余震」。愛しい人への想いを制御できない様が擬人化されている。	
３月２２日　２２：３９ 「制御。あなたは驚くほどにあなただ。あなたほど、あなたである人はいない。あなたであること。優しく受け止めることができるか。余震。そして僕はそんなあなただから、愛しているのに。」	擬人化された「余震」。作者に「あなた」を受け止めることができるか、尋ねられている。	
３月２３日　２３：４１ 「詩よ。お前をつむごうとすると余震の気配がする。お前は地を揺すぶる悪魔と、もしかすると約束を交わしているのか。激しく憤り、口から涎を垂れ流し、すこぶる恐ろしい形相でにらんでいるのだな、原稿用紙の上に首を出し、舌なめずりする悪魔め。」	大地震の後に続いて起こる小地震の意であり、「悪魔」と擬人化されている。	
３月２９日　通信 「◎今、書きたいことがたくさんあります。震災、津波、原発、風評・・・。福島、東北、日本・・・。詩の礫が一斉に頭と心に浮かんできて、もはや手が追い付かない。そこをゆっくりと、大きな船が近づくようになって、余震がやってきます。ゆっくりと離れていきます。悪魔め。◎お願いです。詩を書かせてください。皆さんのメッセージだけが、心の明かりです。」	大地震の後に起こる小地震の意であり、「悪魔」と擬人化されている。	
４月１日　２３：３６ 「悪魔め、悪魔。フン、おまえの弱音を聞いていたら、今日も嫌になったわい。特にお前は相当弱っているな。ゆっくりと地の底から、大きな魚がやってきて、体をひるがえして潜っていくかのような、余震。」	「悪魔」と擬人化された余震。	
４月９日　１８：３１ 「余震。地の波。私たちをあらためて追いたてる、激しい精神。過酷にも地の震えは少しも休めない。逃げる私たちを執拗に追う、地の急襲。」	余震は作者をはじめ被災者を執拗に追い続けたものである。精神的に追い詰めた余震は「激しい精神」と擬人化されている。	

Ⅳ、作者とリンクする「余震」
　作者の姿（不安に駆られる姿、怒る姿）と余震の激しさがリンクする余震。

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
３月１７日　２２：２４ 「震度はどのようにして測る。その度数とはいかなる基準であるのか。ある日は丘の上に立った、小さな旗を眺めていた。あの風にも旗にも、そして揺れるままの現在にも、度数はあるのか。地よ。しーっ、余震だ。」	地震の揺れと共に生活する不安と余震が起きた時の不安をリンクしている。	

資料⑦ 和合亮一が「余震」で表したもの－詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
3月１7日　２２：２７ 「昨日。ガソリンスタンドに車の一列。長蛇の列が3時間ほど続くが、一度も動かず。一番前から伝達。「スタンドは開かない」。開くという事実すら無かった。有ったのは、車の一列。何が私たちを並ばせようとするのか、しーっ、余震だ。」	何も情報がない中生活している自分と予告なく揺れる余震をリンクしている。	
3月１9日　２２：１９ 「余震か。否。」	この投稿の後に、「余震か。否。」で始まる作者とリンクする余震が連続して述べられている。そのためこの詩はそれらの前書きであり、続く詩と同じ作者とリンクする余震であると考える。	
3月１9日　２２：２２ 「余震か。否。だがしかし、常に、余震が私に宿るようになってしまった。揺れは恐ろしい。この恐怖が、常に私に何かを書かせる。詩の礫が夥しく湧いてくる。キーを叩き、メモをする。レコーダーに吹き込む。叫びながら部屋を歩き、床の紙片をこの男は蹴散らしている。宇宙の中に一人。鹿の鳴き声。」	後に続く「否。」で打ち消されている余震は詩の礫が夥しく湧いてくる様子と何かにとり憑かれたようにキーを叩きメモをする作者の様子と余震の苛烈さがリンクしている。	
3月１9日　２２：５７ 「余震か。否。私はある日、避難所の暗がりで、手帳に何かを書き殴っていた。私の文字は私の心など少しももらえない。しかし書くしかない。この徒労感は初めから勝負が決定している。書いているが、何も書けていないからだ。避難所の暗がりで、私は阿呆な修羅であった。7」	後に続く「否。」で打ち消されている余震は避難所の暗闇で書き殴っている作者の激しさ（勢い）と余震の激しさがリンクしている。	
3月１9日　２２：３２ 「余震か。否。私はある日、避難所の正午。米と鶏肉とコンソメスープを貰った。むしゃぶり食べた。舌鼓を打ちながら、書き殴った。帳面を開く『このまま何かが大きく動き続けて、大きく変わらないとしたらどうなるのか』。時の昂然だけが私には思い出せるが、言葉が何を捕らえようとしたか定かではない。」	後に続く「否。」で打ち消されている余震は米と鶏肉とコンソメスープをむしゃぶり食べ、後から振り返ると言葉が何を意味していたの変わらない程、帳面に書き殴っている作者の勢いと余震の勢いがリンクしている。	
3月１9日　２２：３５ 「余震か。否。帳面もまた壊れていく。私の親しい場所・・・、相馬、新地、仙台若林区、女川、南三陸。この時。避難所のテレビの報告が、死者の数を増やしているかのようだった。私は帳面にこの数を記録した。記録？どうしたいのか、私は。偏頭痛が収まらない。」	後に続く「否。」で打ち消されている余震は自分の親しい場所で増えていく死者の数を知り、頭の中で余震が起こったようにぐちゃぐちゃになっていく作者の頭の中とリンクしている。	
3月２２日　２２：２７ 「巨大な力を制御することの難しさが今、福島に二重に与えられてしまっている。自然と人工とが、制御できない脅威という点で重なっていく。余震。」	作者が原発をどのように制御するのか不安に思う気持ちと余震が起きた時の不安な気持ちがリンクする。	
3月２２日　２２：２８ 「制御不能。言葉の脅威。余震。」	制御不能で、「制御」という言葉に脅かされる作者の焦りが余震が起きた時の焦りとリンクする。	
3月２２日　２２：３０ 「言葉に驚かされている。言葉に乞うている。余震。」	余震の恐ろしさと作者が「余震」という言葉に脅えている様子がリンクする。	
3月２２日　２２：３２ 「『制御』であってほしいのです。家族と故郷が、まだ、かろうじて私にはあります。奪われてしまった方に・・・、こんなこと、恵まれていますよね・・・。泣くしかありません。私たちは、風吹く荒野に、希有な草履を無くしてしまいそうです。余震。」	震災後（＝風吹く荒野）に家族（＝希有な草履）との別れが「制御」できてほしいと願い泣くしかできない作者の様子が余震が起きた時の何もできず、ただ泣き願うことしかできない様子とリンクする。	

資料⑧ 和合亮一が「余震」で表したもの－詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
３月２２日　２２：４２ 「あなたは誰よりも早く、しなやかに、あなたであり続ける。そんなあなたを愛しています。余震。あなた、大切なあなた。「大切な」の後には「あなた」しか、続かないのです。安否不明。１６６３０人以上。」	作者の「あなた」に対する強い気持ちと余震の強さがリンクする。	
３月２２日　２２：５０ 「現時点。死亡４３０４人、安否不明１６６３０人、５００、５５５。今日の現実に対して詩を捧げます。余震。」	作者の東日本大震災の死者・行方不明者数の数字に動揺する様子（…６３０人、５００、５５５。…）と余震の様子がリンクする。	
３月２２日　２３：００ 「明日、あなたは何をしていますか。明日も今日の延長を生きる。余震。」	作者が強く気持ちを固めた様子と余震の強さがリンクする。	
３月２２日　２３：０２ 「明日、あなたは何をしていますか。明日も今日の延長を耐える。余震。」	作者が強く気持ちを固めた様子と余震の強さがリンクする。	
３月２２日２３：０３ 「『フクシマ』は一晩で世界に広まった、むしろチャンスだと思う、と地元のある番組で言っていた。ここで復興することが出来たら、世界に名を示すことが出来る、ともう一言。余震。」	震災・原発によって「フクシマ」という言葉が一日で広まったことに対してポジティブに捉えているニュースとそう捉えることができない作者の心の中の葛藤と余震の揺れの様子がリンクする。	
３月２２日　２３：０６ 「希望を抱いた。有難いと思った。そんなご褒美があるのかもしれない。でもね。ここには家族と故郷があるんだよ。僕は突然に世界地図を燃やすかもしれない。余震。」	３．１１の震災に対する作者の怒り、動揺と余震の揺れの様子がリンクする。	
３月２２日　２３：０９ 「家族を守ることと、『制御』とが、どうしてイコールでなくてはいけないのか。あのさ。日本社会よ。そろそろ僕は爪を切ろう。余震。」	当時の日本社会の制度（原発被害による避難など？）に対する怒りと余震の揺れがリンクする。	
３月２２日　２３：１５ 「私は言葉を制御することが出来ない。余震。」	言葉を制御することのできない私と揺れ、さざ波を制御することのできない余震がリンクする。	
３月２２日　２３：１９ 「子供の頃、思っていた。絶対にこの食卓は続く。長男の僕は家族の人気者。僕がおしゃべりすると、家族は楽しい。毎晩がお祭りだった。余震。」	絶対がないことを知り驚いた作者の気持ちと余震の揺れがリンクする。	
３月２３日　２３：２９ 「余震（①）。いわき震度５．それにしても４や５が普通の感覚になっているのが、あらためて恐ろしい。息子と電話で話す。今の避難先の、山形の学校に、一時的にでも転入することも考えなくて・・・な。余震（②）か。」	①②大地震の後に続いて起こる小地震の意。地面が揺れることに慣れってしまった様子が②からわかる。	
４月９日　２２：２７ 「地震酔い、醒めやらない揺れの中で私たち、地震酔い、揺れていなくても揺れている、揺れていても揺れている、揺れていても揺れていなくても揺れている、揺れていても揺れていなくても揺れていない、揺りかごの中で、しーっ、余震だ。」	・地震酔いをしている、揺れていなくても揺れている作者の姿と余震がリンクしている。 ・最後の「しっー、」というフレーズが詩全体に緊張感をたせ、作者に呼び掛けている。	
４月９日　２３：００ 「探す。無い。探す。無い。祖母の絵。無い。探す。見つからない。私が探しているのは、貼り絵だが、それだけでは無い。探す。私が探しているのは貼り絵だが、祖母の姿を探している。探す。無い。余震。」	続けて投稿されており、二つの詩は、最後に「余震」と置かれている。探しても見つからない祖母の姿、祖母の絵を探し続けてぐちゃぐちゃになっていく作者の心の様子と余震の揺れがリンクしている。	
４月９日　２３：０１ 「ばあちゃん、何処にいますか、ばあちゃん。瓦礫の中で家族を探している人々よ、今夜は共に泣きましょう。共に探しましょう。共に泣きましょう。余震。」		

Ｖ、作者の感情の起爆剤である「余震」

詩に表現されている「余震」が作者の怒り・不安の感情のきっかけとなっている「余震」。

資料⑨ 和合亮一が「余震」で表したもの－詩の礫から－ ●●

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
３月２０日　２２：２８ 「馬が追う、言葉が追う、余震が追う。馬が来る、言葉が来る、余震が来る。馬に取り残される、言葉に取り残される、余震に取り残される。僕は幼くなるしかない。うわああああん。あかあさーん、おかあさーん。」	擬人化された「余震」。それは、馬のように作者を追うもので、作者を取り残すものであり、作者にとって恐ろしいものであることがわかる。続く、「うわああああん。おかあさーん、おかあさーん。」という記述は作者の気持ちが乱れていることがわかる。 この独特なリズムは馬が駆けるよう迫ってくる音、頭の中にあふれ出てくる言葉、作者を襲う余震を表している。	
３月２０日　２２：２９ 「余震。余震。余震。俺はもう終わりかもしんねえが、ここまで馬鹿にされてたまるか。最後の最後に『地震』を滅茶苦茶にしてやっぞ。」	地震、余震の揺れにに対する怒りがありのままに書かれていることから、「余震」は作者の感情の起爆剤であるとわかる	
３月２０日　２３：３１ 「余震。この時、私は命だ。」	３つの詩のリズムを作る。 余震の後に作者の怒が述べられていることから、余震は作者の怒りの起爆剤であるとわかる。	
３月２０日　２３：３３ 「余震。許せるか、あなたは。この怒りを。」		
３月２０日　２３：３３ 「余震。許せるか、あなたは。この時を。」		
３月２２日　２２：５８ 「『福島第一　制御困難』。来るべき時が来たのか、否。希望を信じるか。余震。大きい。まただ。ツイッターガウゴイテクレナイ、震度4。この速度の出しにくさは、困難。制御。第一。福島。」	感情の起爆剤となる余震。 「余震」を境に詩の流れがかわっているのがわかる。希望を信じようと思ったが、余震という現実を目の当たりにしていることが分かる。 ここから余震は作者を苦しめるものでもあり、希望を失うものでもある。 詩のリズムを作る。	
３月２３日　２２：２８ 「余震。揺れている。私が揺れているのかもしれない。揺れているわつぃが揺れている。揺れている私が揺れている私を揺すぶっている・揺れている私が揺れている私を揺すぶっている私を揺すぶっている。揺れている私が揺れている私を揺すぶっている私を揺すぶっている私を揺すぶる。」	後に続く詩から、作者は平常心を取り乱している。「余震」は作者の感情の起爆剤となっている。	
３月２３日　２３：３９ 「余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ！いいか、余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ！いいかいいか余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ！余震はなこの辺の犬が全部吠えるんだ！いいか余震はこの辺の犬が全部吠えるんだ！いいかいいか余震はなこの辺の犬が全部吠え」	大地震の後に続いて起こる小地震の意であり、同時に「いいか」と人に確認を呼び掛けていることと語尾の強い言い方から、作者は余震に対して動揺を見せており、「余震」は作者の感情の起爆剤となっている。	

Ⅵ、その他

詩の内容	分析と考察	地震が起きた時刻と震源地と最大震度
３月２２日　２２：２４ 「相馬の果てなき泥地よ。無人の小高の町よ。波を横腹に受けた新地の駅よ。国道に倒れた、横田俺の漁船よ。余震。」	相馬が地震で荒れている様子と作者の様子がリンクする。	
３月２２日　２３：０７ 「静かです。放射能の夜です。余震。」	詩のリズムを作る。	
３月２２日　２２：４７　（前書） 「昨日の「礫の礫」を書き終えたら急に「礫」そのものの内部に入ってみたくなりました。阿呆な修羅です。お付き合いください。余震。」	詩の一部ではない、前書きにも余震という言葉が使われている。また3月２２日の詩は「礫」の内部が書かれていることがわかる。ここかから、余震は「礫」の内部であり一部であることが考察できる。	
４月１日　２２：５０ 「友人にメールをする。『なんだか、福島という言葉の響きは完全に変わってしまったね』。無人の回送バスが素通りしていく。余震か。否。バス停に貼られた紙が、風で飛んだ。追いかけたが、すっと、さらに遠くへ。福島、ふくしま。」	地震が起き、ぐちゃぐちゃと変わった福島の様子と余震の揺れがリンクしている。	